

前一六〇年代のメンピスにおける一事件

——「ギリシア人なので襲われた」プトレマイオスの場合——

田 中 穂 積

はじめに

ここに取り上げるのは、前二世紀半ば、メンピス（メンフィス）のサラピエイオン（サラピス神殿域）にカトケー——つまり俗界を離れ、隠遁して神殿に奉仕すること——なる者として住んでいた、グラウキアスの子プトレマイオス自身と、かれの近辺の者たちや、かれの弟に関する出来事である。その史料は、U・ヴィルケンが一八九一年までに公刊されたパピルス文書のうち、主にプトレマイオス朝時代のものを取り上げ、それに克明な解説と注釈を加えて刊行した『プトレマイオス朝時代の文書』（以下UPZと略記）のなかに収録されている⁽¹⁾。プトレマイオスや、かれを取り巻く人々を浮かび上がらせている、いわゆるサラピエイオン関係文書の多くはギリシア語で、その数は一〇〇通をこえており、わずかながらエジプト語（デイモティック）も含まれている。ここに紹介するのは、そのごく一部にすぎないが、当時、エジプトで生まれたマケドニア系のプトレマイオスなる者が、いかなる状況にあつたかという一例である。この問題点に入るまえに、まずメンピスとサラピエイオン事情を取り上げておきたい。

一 メンピスとサラピエイオン

ナイル下流域の古くからの都市、*Memphis* は、ギリシア語でメンピスと呼ばれた。前一世紀末頃に、ここを訪れた歴史・地理学者ストラポーンは、メンピスはエジプト人の王都であつて、オシリス神と同一視されたアピス神の神域、ヘーパイストスの神域、アプロディテーの神域等があると記し、ここが諸神の住まう町であるとの印象を強くしている。また、かれはメンピスの都市は大きくて、人口も多く、アレクサンドレイアに次ぐ、エジプト第二の都市であり、さまざまな種族が混住していると述べている (*Strab. XVII, 1, 31-32*)。

ナイル川西岸に位置するメンピスは、およそ二つの地域からなつてゐる。その一つはナイル河岸の一帶で、プタハ神殿、また、いわゆるアプリアス宮殿などがあり、プトレマイオス一世の拠点も、アレクサンドレイアに移されるまでは、ここに置かれていた。また、ここは通商に重要な港を備え、都市経済に主要な役割を果たし、異民族の移住者が多く居住していた。ただし、現在のナイル河床は東へ三キロメートル以上も移動している。もう一つは、西方にあたる高い地域で、河岸地域と運河で仕切られており、サラピエイオン、聖獣などを葬つたネクロポリスなどが存在し、ネクロポリスにはエジプト原住民の居住がみられた。

ストラポーンが、メンピスには、さまざまな種族が混住していると、述べてゐるのは、主として河岸地域であつたとおもわれる。そこには、エジプト人が最も多かつたであろうが、メンピスがエジプト古来の都市であつたことから、エジプト近隣の民族がみられた。はやくは、商人としてのカナン人の移住であろう。またヘーロドトスによれば、前六世紀にはイオニア人やカリヤ人が傭兵として、ここに住んでゐる (*Hdt. II, 152-54*)。しかし、アレクサンドロスの遠征が契機となつた、ギリシア人、またマケドニア人移住者の新しい波は、従前とは異なり、その規模におい

ても新たなものであった。それが、河岸地域におけるヘッレーニオン（ギリシア人居住区）の形成であったかもしれない。またプトレマイオス一世が、最初、このメンピスを軍事拠点として、軍隊を駐屯させたことは、さらにこの都市の事情に変化をもたらした、とおもわれる。ギリシア人共同組織体が形成されていたことは、その役職者であるテイモークイの存在からも知られ（UPZ、文書番号149）、ヘッレーニオンの規模も大きくなったとみてよい。ここでは、その他の外来の民族については、省略しておく。

また、ストラポーンによれば、サラピス神殿の地域は、風が砂を運ぶため、スピルクスが砂に埋まつたりしているのが見られる、と記している。つまり、サラピエイオンはメンピスの西地域にあつて、その神域は、いわば聖獣のネクロポリスの地域に位置する。サラピエイオンの東側にある参道入口には、多分、前二世紀頃の制作とおもわれる、ホメーロス、ピンダロス、ピュタゴラスら、一人のギリシア人の像が半円形に並べられていた。それは、エジプト風建造物の景観と非常に対照的であつた。そこからサラピエイオンのなかに向かつて通路を西に進むと、通路の北側に二つの礼拝所があり、その一つはギリシア風であり、次のものはエジプト風で、ここから、現在ルーブル美術館でみられるアピス牛像が発見されている。サラピエイオンのなかには、アピス牛を葬つたいくつかの地下室、これと連結する神殿建築物、それに、関連ある崇拜物、その他、後で取り上げるアスタルテー神殿等がみられた。地下室には西方向へ、岩下深くに主要な二本の回廊があつて、そこには木材と花崗岩で造られた、大きな棺がいくつかあり、アピス牛のミイラが保存されていた。これらが一九世紀半ばに発掘されたとき、注目的になつた⁽²⁾。

サラピエイオンは、大サラピエイオンとも呼ばれているように、そこには多くの神殿と神像があつて、メンピスを訪れるエジプト人、ギリシア人その他の者たちの聖所であつた。サラピス神とは、本来、エジプト人の崇拜対象であつたオシリス—アピス、あるいはオセラピスに、ギリシア風の神性を加味したものであつた。このヘレニズムの神サラピスは、メンピスを発祥としており、ここではサラピスがアピス牛として表されされたが、それはエジプト人の

ためのものであり、移住のギリシア人に対しては、地下神とみなされたこの神が、ディオニュソスと同一視されたり、またその他の神性でもって表現された。

一 一 カトケーたるプトレマイオスとかれを取り巻く人々

さて、グラウキアスの子プトレマイオスは、メンピスのサラピエイオンの一郭にあるアスタルテー神殿域でカトケー (Katoche) ——つまり俗界を離れ、隠遁して神殿に奉仕すること——なる者として住むことになった⁽³⁾。それは、前一七二年、かれが三〇歳くらいの頃であった。父のグラウキアスはエジプトに植民したマケドニア兵の家系であつて、ヘーラクレオポリス県のプシキスに住んでいた（これはメンピスの南にあり、アルシノエ県の南東にあたる）。かれは、王の「同族」という呼称を授与された植民軍団に所屬していた。このグラウキアスは、前一六四年、「混乱のなか」で死んだとされており、当時、動乱が発生していたものとおもわれる⁽⁴⁾。グラウキアスの妻の名前は分からない。グラウキアスの子供は、長子のプトレマイオスの他に、ヒツパロス、サラピオン、末弟のアポッローニオス、それに、おそらく一人の娘がいた。このうち、プトレマイオスとアポッローニオスがサラピエイオンのアスタルテー神殿域に住むことになるのである。しかし、アポッローニオスは、後で取り上げるように、軍人の道を選んだ⁽⁵⁾。

プトレマイオスは、通常ならば、父親グラウキアスの後を継いでマケドニア兵として軍隊勤務ができたであろう。しかし、兵役に就かずに、カトケーに入った動機については、うかがい知ることができない。かれ自身、あるいは、かれの身边に変化があつたのであろう。

ところで、カトケー (Katoche) とは、いかなる習慣であるかについて、U・ヴィルケンがサラピエイオン関係文

書に解説を付して以来、論議されてきたところである⁽⁶⁾。カトケーを上記において、「俗界を離れ、隠遁者として神殿に奉仕すること」と表現しておいた。このカトケーに関しては、従来、神殿に引き止められる理由、神殿生活における役割、そして、そのような条件から解放される可能性、といった幾つかの面から論議されてきた。勿論、エジプト以外の場合と比較するという見方も可能であるが、それは必ずしも当を得たものではない。要は、史料が多くないということにある。その起源についてみれば、負債をかかえた者、あるいは軽罪を犯した者が神によって拘束される、という慣習からきているとする考えがある。そして自身を隠遁者として神に捧げるのである。あるいは、神殿に庇護を求めた者を保護する、いわゆるギリシア語でいう「アシュリア」(asylia)の制度、また宗教的隠遁者として神殿に奉仕すること、などがあげられるのである。

プトレマイオスを通して、メンピスにおけるカトケーの実状をみるならば、次のことがいえよう。そのカトケーはサラピエイオンにおいてであり、プトレマイオス、またその他の者もアスタルテー神殿域に居住している。プトレマイオスと共に住んでいたのは、ハルマイスで、かれがエジプト人であるという確証はないが、そのように推定される。このハルマイスは、施し物をえて生活していたようであり、アスタルテー神殿域に住むものは、一般にそうした習慣があったのかもしれない⁽⁷⁾。また、ディピロスなる者も、前一六一年には「サラピスに仕えるために留められていた奉仕者の一人」として、その名が知られている⁽⁸⁾。プトレマイオスの末弟アポッローニオスも、一時的ではあるが、アスタルテーの神殿域に住んでいた(前一五八年)。サラピエイオンにおけるカトケーがアスタルテー神殿域であったことは、このフェニキアの神アスタルテーとカトケーが何らかの関係があること、ひいてはカトケーとフェニキアにみられた制度との関連も予想されるのである。

プトレマイオスの周辺者については、まだ他に知られている。その一例は、タウエースとタオウスの姉妹で、関係する文書はおよそ五〇通に達している。二人は、前一六三年九月にサラピエイオンを訪れたプトレマイオス六世と

王妃クレオパトラに嘆願書を提出した。それは、プトレマイオスによる代筆であるが、そこから次のことがうかがえる。彼女たちの母親ネポリスは、彼女らの父親（名前は、おそらくアルギュノウテイス）から去って、ソーゲネースの子ピリッポスなる軍人と懇ろになり、そのうえ、彼女らの父親を殺害しようとした。しかし、それは果たさなかつたが、娘である彼女らを家から放り出した。それで、彼女らは父親の友人であったプトレマイオスを頼ってサラピエイオンにやって来た。そうするうちに、彼女らはアピス牛の双女（ギリシア語で *didymai*）になったという（UP Z、文書番号18と19）。ここには、その他の事情もあげられており、それに、また別の関連文書も知られているが、省略しておく。

双女というのは、メンピスで古くから伝わる祭儀の形式で、アピス牛が死ぬと、イシスとネプテュスを象徴する二人の女性が、七〇日間、死んだアピスの喪に入る。そして、続けて新しいアピス牛が死ぬまで、その牛の随伴者としてサラピエイオンに留まるのである。つまり、前一六四年四月に双女にされたのが、タウエースとタオウスの姉妹であった。また、この二人には姉妹があり、名をタターミスといい、先にあげたハルマイスと一緒に住んでいた。

プトレマイオスや、その他カトケーにある者は、パストポロイの監督下におかれ、サラピエイオンにおいて生活を保証されているのである。ギリシア語のパストポロイとは、神官階層ではないが、神官より低い階層で、神殿の業務をおこない、また、かれら自身、神殿に關係する商いもしていた。このパストポロイの一人であるイムーテースが、後で述べるように、前一六三年にプトレマイオスを襲っているのである。プトレマイオスは、パストポロイの下で、神殿から月々の給与を受け、また祭儀に要する費用を受け取っている。かれの行動はサラピエイオン内に制限されていたが、この神域を訪れた者とは出会うこともできず、また外部との通信も可能であったことは、かれの兄弟や王などへの書簡からうかがえる。

二三 「私がギリシア人なので襲われた」

そこで、次にあげる二文書は、前述のプトレマイオスがサラピエイオンのなかにあるアスタルティエイオン（アスタルテ―神殿域）において襲われたため、身の安全と保護を訴えたものである。サラピエイオンには、総じて、エジプト人が多く、プトレマイオスのようなギリシア語を母国語とした者は少なかったとおもわれる。まず、UPZ、文書番号7を取り上げる。

「王の友人にして、ストラテゴスであるディオニシオスへ、グラウキアスの子プトレマイオス、マケドニア人、大サラピエイオンにおいて、ここ一〇年間のカトケーにあるものより。私は、いまあげた神域において、清掃者、パン焼き職人として、それぞれ勤めている者たちによって、虐待されています。かれらは、また、医者、ハルケピス、衣服販売人のミユス、それに私には名前が分からない者たちのいる、下手のアヌービエイオン（アヌーピス神殿域）に何時も行っております。第一九年、パオーピ月一日、私が神に仕えて住んでおりますアスタルティエイオンに現われて、丁度、以前に暴動がおきたときと同じように、力づくで、私をそこから引き出して、追い出そうとしました。それは、私がギリシア人であるということ（*para to Hellēna me cina*）。私は、かれらが見境いなく振舞っているのを見て、閉じこまりました。しかし、かれらは、入口の方で私の仲間のハルマイスを見付け、かれを青銅の道具で殴りつけました。それゆえ、アヌービエイオンにいて、あなたの下（で首席警務官の地位）にあるメネデーモスに指示して、かれらに私の言い分を認めさせるよう、命じて下さることをお願いいたします。もし、かれらがあなたの下への出頭命令に従わないならば、かれらに対し処罰なさることとおもっております。敬具。

(ストラテীগスより) メネデーモスへ。かれが、自分の言い分を通すことが出来たかを見届けよ。第一九年、パオーピ月一九日。」

この書簡の差出人プトレマイオスの宛先は、ディオニュシオスである。このディオニュシオスは、「王の友人」と表現されている。この呼び方は、プトレマイオス朝の宮廷における称号であつて、位階を示すときにも用いられる。また、かれはストラテীগス(將軍)と呼ばれているが、ここではエジプトにおける地方長官のことで、具体的には、王の任命によるメンピス県の県知事である。プトレマイオスが襲われた第一九年パオーピ月一日は、前一六三年一月一二日にあたる。襲われた理由として、かれがギリシア人である、ということあげている。

取り上げるもう一つのもは、UPZ、文書番号8である。

「王の友人にして、ストラテীগスであるディオニュシオスへ、グラウキアスの子プトレマイオス、マケドニア人、メンピスの大サラピエイオンにおける二二年間のカトケーにあるものより。私は以下に名指しをしている神殿の清掃者たちによつて、ひどく乱暴され、生命の危機にさらされましたので、私の言い分を主張できることとおもひ、援助をもとめて、あなたの許に逃避しております。第二二年、パオーピ月八日に、かれらは神域内にあるアスタルティエイオンにやつて来ました。私は、上述の年間にわたつて、カトケーのために、そこに住んでいたのですが、かれらの或る者は手に石を持ち、或る者は棒を持って、口実を設けて神殿を略奪し、そして私がギリシア人であるといふことだ(ενεχε παρα το Hellana einai)、私を殺そうとし、無理遣り押し込んできたのです。私はドアのところだ、かれらを押し止めて、ドアを施錠し、そして出来る限りの大声で、かれらに向かつて、おとなしく立ち去るよう申しましたが、かれらは離れようとしませんでした。私の隣人で、サラピスに仕えるために留められていた奉仕者の一人、ディピロスが、このような聖域における、その振舞いに憤つて抗議すると、かれらは、かれを押しつけて、荒々しく取り押さえ、殴り付けましたので、かれらの無法な暴力は、だ

れが見ても明らかでした。この同じ者たちが、第一九年のパオーピ月に、同様な行爲をいたしました。そのとき、私はあなたに請願しました。しかし、誰もこの件について取り上げてくれませんでしたので、かれらは警告されずに済むと、ますます横柄な態度を取るようになりました。それゆえ、何卒、かれらを、あなたの前に呼び出すよう、お命じ下さることをお願いいたします。そうすれば、かれらは、適正な判決を受けられるものと、おもっております。敬具。

(糾明される者は、)衣服販売人のミュス、担ぎ運搬人のブソスナウス、パン焼き職人のイムータース、穀物販売人のハレムバスニス、運搬人のストトエーティス、医者 of ハルケピス、カーベット織工のポ・オス、その他、私は、一緒にいた者の名前を知りません。」

プトレマイオスが襲われた第二二年、パオーピ月八日は、前一六二年、一月九日にあたる。襲われた理由として、再び、かれがギリシア人であることをあげている。襲った者たちは、神官ではなく、低い階層の者であり、ミスというキャリアの人名を持つ者の他は、すべてエジプトの人名である。このとき抗議したのが、プトレマイオスの仲間であったディピロスである。プトレマイオスは、自分がギリシア人であるために襲われたのは、これが初めてでなく、第一九年、パオーピ月にもあり、このことについては、ディオニュシオスに訴えたが、取り上げてもらえなかった、と断り書きしている。

次にあげるのは、アポッローニオスを入隊させようとした兄プトレマイオスが、前一五八年一〇月三日付で、王プトレマイオス六世宛てに提出した嘆願書である (UPZ、文書番号14)。アポッローニオスは、前一七五年一二月生まれとおもわれるから (同、文書番号20)、このとき、ほぼ一八歳になっている。プトレマイオスは、サラピエイオンにおける人間関係、また弟の将来やプトレマイオス自身のことなどを考えて、かれを軍人にしようとした。

「ピロメートルス (母を愛する) なる神々であられる、王プトレマイオスと王妃にして妹君のクレオパトラへ、

マケドニア人の家系で、ヘーラクレオポリス県出身のマケドニア人グラウキアスの子プトレマイオスより。ヘーラクレオポリス県において、王の同族なる称号を授与された植民軍団におりました、上記の父グラウキアスは混乱の時期に他界いたしました。その子供たちのなかには、私と弟のアポッローニオスがおります。ところが、私はここ一五年の間、メンピスの大サラピエイオンにおきましてカトケーなるものとして過ごしており、また子供もおりませんので、上記の私の弟を軍務に就かせなければならぬような次第です。そうすることで、私ははから援助を受け、生計も相応に維持でき、いまのまま、カトケーとしておられます。それゆえ、ピロメートルなる偉大なる神々であられる、あなた方に、上述の（一五年の）間を斟酌下さるよう、お願いいたします。偉大なる神々にして救済者であられる、あなた方の庇護を受け、私の弟の軍隊勤務の指示をいただくこと以外、私には糊口をしのぐすべはございません。もし、お許し下さるならば、このような祭儀に従事しております全ての者に垂れておられる援助を、また私にもお与え下さいまして、上述の私の弟アポッローニオスを、メンピス駐屯のデクセイラオスの旗下に編入すること、また、この弟に、俸禄を受けております者たちと同じ給与と糧食を支給することを当該部局に指示下さるよう、お願いいたします。そうすれば、私は相応の生活ができ、そしてあなた方とお子たちのために供養することができ、あなた方が、ヘーリオス（太陽）が照らすあまねく地上の永遠の主でありますよう（祈ります）。このことが成されますと、私はあなた方より、生計の援助を頂けることとなります。

敬具。」

この嘆願書に関連して、同文書（UPZ、文書番号14）のなかで、王からの命令として、必要額の書類提出の要求がみられる。また、同じく、王からの命令として、アポッローニオスをデクセイラオスの旗下に編入し、一五〇ドラクマと、三アルタバの小麦、このうち三分の二は一〇〇ドラクマの金額で、それぞれ支給するよう伝達されている。他にも、この嘆願書の取り扱いに関する文書がみられるが、省略しておく。

ここで、再度、プトレマイオスが襲われた理由を考察してみたい。かれを襲った者たちについては、その名が先にあげた史料（UPZ、文書番号7と8）にあらわれている。その者たちのうち、医者のハルケピス、担ぎ運搬人のプソスナウスについては、当史料以外に見出すことはできない。その他の者については、その名前が他の史料にあらわれている場合もあるが、しかし、その人物像を特定することはできない。ところで、プトレマイオス自身は、自分を襲撃した者のなかに、神殿業務に携わる階層であるパストポロイの一人イムーテースがいたことは、神官たちの示唆によるものではないか、と疑っていたかもしれない。ハウトリアーンによれば、プトレマイオス襲撃グループの首謀者は、カリヤ人ともみられるミュスと穀物販売人のハレムバスニスであった、とみている。総じて、これらの者はエジプト人で、また社会階層としては、低い者たちであった⁽⁹⁾。

プトレマイオスは、自分を身分上、マケドニア人と称している。しかし、かれは襲われた理由として、自分がギリシア人であるから、としている。このマケドニア人、ギリシア人という二つの表現が、同一書簡にあらわれているのである。このことは、当時、ギリシア人とマケドニア人は、同列におかれ、すべての者ではないにしても、かれらは、一応、特権階層とみなされており、また同じギリシア語を話していたことから、ギリシア人という呼称が、その総称的な表現であったとおもわれる。プトレマイオスは、嘆願書においては、父親がマケドニア人軍人であったこともあって、マケドニア系を強調しているのである。

では、なぜギリシア人であるがゆえに、攻撃されねばならなかったか。その理由として、「一」この前二世紀半ばには、メンピスまたエジプトにおいては、反ギリシア主義の風潮が広まっていたためとみるか、あるいは「二」プトレマイオス、ないし、かれのグループを目標とした、いわば個人的な攻撃であったものを、プトレマイオスが反ギリシア主義の立場によるものと受け止めたのか、また、「三」それら両方の重なりであったのか、といった幾つかの解釈ができる。

そこで、第一の問題点についていえば、プトレマイオスは、先にあげた史料以外にも、私がギリシア人なので、といった表現をしている。また、取り上げたUPZ、文書番号7（前一六三年一月二日の出来事）のなかで、「丁度、以前に暴動がおきたときと同じように、力ずくで、私をそこから引き出して、」と語っている。この暴動が何を指しているのかは不明である。しかし、プトレマイオスの父親グラウキアスは、前一六四年一〇月、「混乱のなかで」死んでいることから（UPZ、文書番号14）、当時、動乱が続発していた可能性は十分にあり、その渦中で生命を落したのかもしれない。さらにいえば、後述の前一六〇年代における上エジプトの反乱との結び付きについても、不明であるが、その影響をまったく無視することもできない。いずれにしても、エジプト人の、いわゆるナシヨナリズムが高揚した時期であったことは、否定できない。

第二の問題点については、その一つにサラピエイオンにおける、プトレマイオスの負債についての問題がある。かれは、神官たちがかれの所に押し掛けて、所有物を差し押えられるのを恐れていたようである⁴⁰。かれは、サラピエイオンで過ごす間に、小商いのような行為をしていたようにも見受けられるが、それと負債とがどう結び付くのかは、分からない。この他、プトレマイオスの末弟アポッローニオスが、サラピエイオン内のテエベシスの店で、灯心を買うとき（前一五八年六月二三日）、テエベシスの子供たちと口論をしている⁴¹。このテエベシスの兄弟は神官であった。このことは、以前からプトレマイオスがテエベシスと不仲であったのかもしれない。また、双女の母親の知人がサラピエイオンにいた双女から、彼女らの異父兄弟パクラーテースを使つて金品を巻き上げようとしたことがあった（UPZ、文書番号8）。他方、双女の保護者はプトレマイオスであり、また双女の姉妹タテミスと一緒に住んでいたのは、プトレマイオスの仲間ハルマイスであった。このような関係から、パクラーテースもプトレマイオス襲撃の仲間ではなかったか、ともおもわれる。

ここで、第二にあげた、いくつかの問題点がプトレマイオスが襲われた理由として、あげられるとしても、やはり

第一の問題点のギリシア人である、との理由の比重は大きいようにおもえるのである。そして、それがサラピエイオンの内外の人間関係と複雑に交錯しているようにみえる。

おわりに

最後に、当時のエジプトについて、一瞥しておきたい。史家ポリュビオスは、ラビアの戦い（前二一七年）で、プトレマイオス四世がエジプト人を武装させて戦列に用い、この戦いに勝利したことは、エジプト人の間で、かれらの指導者を擁立しよとする傾向を強め、その後、その試みは成功するのである、としている（Polyb. V, 107, 1-3）。この成功が何を意味するか定かでないが、かれは、この王の後年において、残忍で無法な争いがあったが、しかし、それは激戦とか、海戦、攻囲といった、とくに取り上げるほどのものではなかった、という（Polyb. IV, 12, 4）。これはデルタ地域でおこった原住民の反抗に関するものとおもわれ、前一九七年に一時終息している。他方、上エジプトにおける反抗は、前二〇七／六—前一八六年の間続いた⁴⁰。また、ポリュビオスはアレクサンドレイアにおけるエジプト人を激高しやすく、市民生活に馴染まない傾向にある、としている（Polyb. XXXIV, 14, 2-3）。ポリュビオスがアレクサンドレイアを訪れたのは前一四六年より後と考えられ、その頃のアレクサンドレイア事情の観察であろう。この史家にとっては、ラビアの戦い以後のエジプト人の意識を、為政者に対する反抗的態度と受け止めてきた一面もあり、したがって、エジプト人に対する表現は、芳しいものではない。

ラビアの戦いのあと、王にファラオの称号が強調されるようになる⁴¹。そこには、エジプト神官層に対する讓歩と、かれらとの提携を深めたプトレマイオス朝の態度がみられ、またエジプトの農民、その他、産業従業者に対する圧政をかわす姿勢もみられた。そうした施策が、恩赦という表現による緩和政策であり、徴税の軽減であった⁴²。

こうした動きのなかで、前一六〇年代は、複雑な社会様相を呈した。そこには、通称、第六次シリア戦争と呼ばれる、アンテリオコス四世の二度にわたるエジプト侵攻という大禍もあった。最初は、エジプト軍を破ったアンテリオコス四世は、プトレマイオス六世を連れてメンピスに入っているが、エジプトで財物を略奪したとおもわれる（前一六九年）。このとき、プトレマイオス八世とクレオパトラ二世が、アレクサンドレイアにおいて、アンテリオコス四世に抵抗しているが、アンテリオコス四世はシリアに引き上げた。その後、プトレマイオス六世とプトレマイオス八世が和解したのを知ったアンテリオコス四世は、再びエジプトに侵攻した（前一六八年）。そして、アンテリオコス四世はメンピスにおいて、支配権を立てようとしたようである。しかし、かれはローマ側のエジプトから撤退するようにとの通告に屈し、シリアに引き上げている。こうした外寇はエジプトを不安に陥れた。

この前一六〇年代の半ばとおもわれるが（前一六五／四年？）、ディオドローロスによれば、ベトサラピスと呼ばれていたディオニュシオスなる者が、エジプト人を巻き込んだ反乱を起こしている（*Diod. XXXI, 15 a*）。この時期、アルシノエ県でも、アンテリオコス四世による神殿略奪の後遺症があり、そしてエジプト人の反抗がみられたことが、知られている²⁰。この反乱は、ディオニュシオス・ベトサラピスの反乱の影響であろうか。

また、ディオドローロスはテーベで起こった反乱を取り上げている（*Diod. XXXI, 17 b*）。これは前一六五年？。エジプト人の反乱とおもわれる時期、保存状態がよくないパピルスにみられる、家を不法占拠されたことに対する訴えは、この反乱と関係するの²¹であろうか²²。

いまあげたような事柄が、それぞれ、どのように関係するのか、正確に把握できないが、前一六〇年代のエジプトにおいては、社会不安が増大していたことは、否定できない。そうしたなかで、先にあげたサラピエイオン文書にみえるグラウキアスの子プトレマイオスが被った災難は偶然でなかった、とみてよからう。

註

- (1) Wicken, U., *Urkunden der Ptolemäerzeit*, Bd. I (Papyri aus Unterägypten), Berlin und Leipzig, 1927. [=UPZ]
- (2) Thompson, D. J., *Memphis under the Ptolemies*, Princeton University Press, (1988), 9-31. トマスンはクレネリスム時代のメンピスの人口を五、二〇万人の範囲にみている。同書三五頁。
- (3) プトレマイオスに関しては、UPZ, 7, 8, 14, 15他 (UPZの数字は文書番号である。以下同じ)。
- (4) プトレマイオスの父ゲラウキアスに関しては、UPZ, 9-11, 14他。
- (5) プトレマイオスの末弟マホメッローニオスについては、UPZ, 12, 13, 14, 62他。
- (6) カトケーの問題点の整理については、Goudriam, K., *Ethnicity in Ptolemaic Egypt*, Amsterdam, (1988), 42-43; Thompson, D. J., *op. cit.*, 216-224.
- (7) ハルマイスに関しては、UPZ, 2, 5, 7。
- (8) デイピロスに関しては、UPZ, 8。この人物は、当文書以外に見当らず、その身上についてはよく分からない。
- (9) Goudriam, K., *op. cit.*, 54.
- (10) UPZ, 5, 6, 15。
- (11) UPZ, 12, 13。
- (12) Walbank, F. W., *A Historical Commentary on Polybius*, III, Oxford, (1979), 203.
- (13) *The Cambridge Ancient History*, Second Edition, VII, Part I, ed., Walbank, F. W. et al., (1984), 437-439 (H. Heinen), 562.
- (14) この問題に関しては、金澤長樹「クレネリスム期エジプトの ethnic 諸関係における法的側面」『西洋古史学研究』XLIV (1996), 84-95 (なごびに注にみられる同氏とその他の諸論文をよむ)。
- (15) *The Tebanis Papyri*, III, I, ed., Hunt, A. S. et al., London, (1933), No. 781.
- (16) *Jenaer Papyrus-Urkunden*, Hrsg., Zucker, F. et al., Jena, (1926), Nr. 263.